諸概念・組織等解説一覧

・桜川家

霊山の神を永続的に封印させるための装置として、のちに開祖と呼ばれるようになる平安時代中期の歌人・霊能力者、紀貫之により創設された。初代当主には霊山の神と紀貫之の間に生まれた女子がつき、以後 1000 年以上にわたり女子が当主を継承し続けてきた。だが先代の次期当主、まいが神との結合（当主継承の儀）を直前に一般の男性と駆け落ちをして結婚、男子を出産してしまう。神の子の血脈が男子として誕生しただけでも非常事態であるにも関わらず、まいは産後の肥立ちが良くなかったことが原因でその 2 年後他界してしまう。このことで桜川家は女子の正統後継者は存在しなくなるという未曽有の危機を迎えることとなった。事ここに至り、お屋敷様は正当な血統を有してはいるが男子である真條マモルを暫定当主に据えて急場をしのぎ、神との結合を一日でも早く行い女子を誕生させようとする。マモルはあくまでも次の当主を作らせるための捨て駒。結合がうまくいき神の子が誕生するのであれば彼がどのような最期を迎えようと大きな問題ではないと考えている。桜川家の血を引くものの隠れ分家として存在が公表されていなかった藤代真穂子を当て駒に使い、マモルの能力開発促進に一役買ってもらおうと画策する。

同家は創設時は当主と開祖から与えられた 7 名の家臣一族だけで構成された小さな集団でしかなかったが、時代が下り中世に入ると鎌倉に成立した武家政権から厚い信仰を得るにいたり勢力を拡大していく。関東を一時支配し独立王国を築こうとした平将門を支援していた強大な神を、霊力で封じ込めている実績が評価され、自らも霊的庇護を受けようとする思惑からであった。以後、関東に拠点をもった武家勢力（室町鎌倉府・小田原北条氏・佐竹氏・徳川氏など）からも同様の信奉を受けた。桜川家を庇護することは、関東における正当な支配権を確立した証明でもあると目されるようになったのだ。ただし、桜川家が常に社会から隠された存在であったため、通常の神社や仏閣とは異なり表立っての政治的演出には利用できない。あくまでも政権の精神的支柱としての機能と霊的な庇護が求められた。

なお、現在桜川家の家臣は全国に広がっているが、その最も大きな原因は江戸期における徳川親藩や譜代大名、有力外様大名が徳川本宗家に忠誠を誓う証しとして、特殊技能を有する桜家七臣家の一流を各家が招聘したことが大きい。

時代はさらに下り封建社会が終焉を迎え近代に移行しても、政権との結びつきに変化はなかった。名前が江戸から東京に変わり都が移されたため、関東の安定こそ初期明治政府の最重要課題だったからである。また、財政的にひっ迫していた新政府としては桜川家が鎌倉時代以来寄進されてきた莫大な資金にも着目していた。すなわち、東京にある旧大名屋敷など政府が管理していた土地や徳川家の所領と桜川家の有する金や銀などとを交換するというものだった。この提案は受け入れられ、以後桜川家は東京の主要地域のみならず全国に土地を有することになった。これは、近代化が進み主要都市の地価が上昇することで、同家に大きな富をもたらすことになる。またこの金は勃興してきた財閥企業や銀行の

融資にも充てられたことでさらに膨れ上がり、現在ではほぼすべての主要企業や学校・病院等で同家が影響力を行使できるまでになった。ただ、同資金は桜川の名は表に出ることなく使われており、すべて家臣団の中で桜家七臣家と財政に明るい家により運用されているが、どの家もまた自らの名前は表にでないようにしている。

・<u>桜川家屋敷</u>

車寄せ玄関を正面に見た表屋敷

正門

大広間に隣接した廊下（右が大広間・左が庭）

大広間中段の間から上段の間を見る（中段の間の下に下段の間）

＊上段と中段の間に段差はない

大広間の精緻な欄間

書院の間（段差無し）

表屋敷と奥屋敷や別棟とを結ぶ渡り廊下

庭園１　　庭園２　　庭園３

＊上記よりも芝生の面積が大きい（芝５割　池３割　築山・島・石ほか２割）

＊全体としてここまで煌びやかではない。黒色を主体とした質実剛健な構造の中に所々で豪華さがあるのが桜川家屋敷の特徴

江戸幕府三代将軍、徳川家光によって寄進されたものを現在でもほとんど手を加えず使用している。最高の格式を与えられた大名屋敷の構造をしており、中でも大広間と書院の間は江戸城のそれを縮小して模した豪華さがある。

屋敷は大きく表（屋敷）・奥（屋敷）・別棟の三つに区分される。表、もしくは表屋敷は公的な空間にあたり、合計百畳を超える大広間（上段の間・中段の間・下段の間で構成）や大広間以上に格式がある書院の間、当主執務の間、屋内部各班の詰所や台所がある。ここが全体の八割を占める。奥（屋敷）は当主の私的空間である。寝起きや食事、親しい者との接見、入浴などはここで行われる。当主に子ができたことも想定してかなりゆとりをもった構造をしており、建坪だけで 100 坪の広さがある。別棟はお屋敷様が住居する場所にあたる。奥（屋敷）と変わらぬ広さを誇っており、彼女の権力の大きさを物語っている。生活が謎に包まれているため、内部の構造もよく分かっていない。別棟のさらに奥に祈祷所と呼ばれる建物があるが、ここはお屋敷様以外は立入禁止となっている。

これらの三区域は横長の表屋敷を中心に凹型の形で繋がっている。車寄せがある玄関を正面に見たとき、表屋敷左端と渡り廊下で結ばれているのが奥屋敷、右端と同様の渡り廊下で行き来できるのが別棟である。

現代社会にあって、この屋敷の営みは古来とほとんど変わらない。インターネット環境はいうに及ばず、電機は通ってはいるものの照明以外には使われていない。ガスも厨房の一部でしか利用されていない。電話も固定電話が２台あるだけという徹底ぶり。新聞や雑誌は閲覧可能だが、蔵書館（図書館兼博物館機能を持った施設）に行かないと見ることができない。暖房などに利用されているエネルギーの中心はいまだ薪や炭となっている。

東京育ちで現代住居に住んでいたマモルは、桜川家での夜の寒さに耐えられずなかなか眠れなかった。２月下旬のまだ寒さ厳しい中で典型的な日本家屋の生活に慣れるのは一苦労だった。

・奥ノ院

神を封印するための鍵の役割をもつ場所。桜川家屋敷最深部に位置する。神自体は霊山にいるが、神を山に閉じ込めておくための機能を果たしているため、奥ノ院での封印機能が失われる時、神は解放される。桜川家当主継承の儀はここで執り行われ、神を一時的に霊山より召喚させて次期当主との結合が行われる。これにより当主が神から強大な霊力を授かるだけでなく、時間の経過とともに減少していく奥ノ院の封印能力が強化され、お屋敷様の霊力も増強されることになる。

一方この場所は神と桜川家次期当主が対話をすることができる場所でもある。桜川まいは当主継承の儀こそ行わなかったが、儀式前日に奥ノ院に出向き神との対話を行う。その結果導きだした結論が真條孝太郎との駆け落ちだった。

・桜家七臣家（おうかしちしんけ）

600 家を超える家臣団を束ねる七家、嵯蔵（さくら）・米倉（よねくら）・峰元（みねもと）・御厨（みくりや）・守屋（もりや）・川森（かわもり）・川奈（かわな）の各家を指す。開祖、紀貫之が関東下向に際し同行した 7 人の家臣たちがそれぞれの始祖となっており、この 7 家のいずれかにすべての桜川家臣団の家はつながっていく（桜家七臣二十七流）。七家には管掌分野があり、嵯蔵・米倉両家が財務、峰元は芸能、御厨は調理、守屋が営繕と園芸・農業、川森・川奈が武芸となっている。かつては七臣家の中でも序列が存在した。頂点には嵯蔵家が立ち、残りの米倉・峰元・御厨の屋内部系三家が続いた。屋外部系の守屋・川森・川奈の三家はかなり低くみられていたが、時代の変遷に伴い中世以降に政治権力の中心が武家に移ると次第に屋外部系が力をつけていき、近世に入ると七家は完全に対等な関係とみなされるようになった。

現在七家には上下関係が存在しないため、主家への取次や各家間の調整・折衝のための役職が設置されている。これを惣領という。同職は各家の宗家の中で最年長の者が就任するのが習わしとなっており、現在の惣領は峰元家から出ている。齢 96 歳になる峰元かおりが 30 年以上にわたり君臨しているのだ。彼女は芸能班長あやめの曾祖母であり、ひ孫の奉公が終わるまでは惣領も家督も譲る気はないと公言している。なお、あやめにとって峰元かおりは母方の曾祖母であり、彼女自身は峰元姓ではない。

桜家七臣家こそ、お屋敷様、ならびに時の家令部長の意向をくみ、桜川家の霊的・経済的実力をもって日本の各界に隠れた影響を及ぼしている執行機関といえる。

·藤代家

　同家成立は、戦国時代に起こった神の子が双子として誕生したことから端を発する。
双生児が生存権を獲得できるようになったのは現代になってからで、それまでは異端の存在として忌み嫌われた。出産時に双子と判明するとその場で二人目は処分されることが当然の慣習であったのだ。歴史上の人物で双子が登場することがないのはこうしたことが背景としてある。
桜川家にあっても双子の誕生は大きな衝撃となったが、さすがに神の子を生まれてすぐに殺すことは控えられた。二人は未熟児として生まれたため、生存させることを決めた乳児が早死してしまう可能性も上記の決断を後押ししている。ただこのことはお屋敷様と当時の家令などごく一部の中で極秘機密として扱われ、二番目に生まれた乳児は当主継承の儀にあたりそば近くで控えていた家臣の家に移された。時は流れ、無事に成長した次期当主の当主継承が目前に迫ると、お屋敷様は一子相伝の鉄則が崩れる要因になりうる二人目を処分する命を下す。神の子とはいえいつまで異端の輩を生かしておくのかという家臣たちからの無言の圧力に応えた措置ともいえる（その筆頭格が川奈家)。だが、これは表立ってのことであり実際は二人目を預けた家には子どもを連れて逐電するように密命を与えていた。この家こそが藤代家であり、末裔として誕生したのが藤代真穂子となる。当時は群雄割拠・下剋上の時代であり、桜川家といえども安穏としていられる情勢ではなかった。こうした時代背景がお家存続のためお屋敷様に苦肉の決断をさせた。
　桜川家がある街に隣接する全国屈指の学園都市で最大規模の総合病院を経営し、同市中心部に洋風の大邸宅を構えている。
　藤代家は元は西野姓を名乗っており、川奈家の支流にあたる。それが双子の片割れである桜川しずを伴い、上方で逃亡生活を始めるようになってからはこの苗字を使わなくなった。逐電から 100 年ほど経過した江戸初期になると、桜川家でもしずの存在が忘れ去られようとしていた。この頃を見計らい、お屋敷様の支援の元に大阪で薬学の知識を得た五代目弥右衛門（しずと西野家嫡男との間に生まれた男子が初代弥右衛門）が江戸で薬種問屋「開智堂」を開く。身元は隠しながらもようやく世に出る機会が巡ってきたといえる。開智堂は明治に入り近代的な製薬会社に変身をとげ開智堂製薬株式会社が発足。また医師・薬剤師の養成を目的とする開智堂医薬学校を設立させた。これは現在の開智堂大学の前身である。この頃姓を「藤代」とし、政府に届け出ている。現代に入り、研究学園都市構想が計画されると、いち早く総合病院開設を決断。以後藤代本家が同病院「藤代記念総合病院」の経営に専念し、会社・学校に関しては分家に委ねると、藤代本家は東京から研究学園都市に転居した。実に 500 年ぶりの里帰りが実現したことになる。
　現院長は三代目で藤代真穂子の父が務めている。母は副院長。祖父母は同じ敷地に和風の隠居所を設けて生活している。祖父は藤代記念総合病院の名誉院長・開智堂製薬最高顧問・学校法人開智堂大学名誉理事長でもある。

·学校法人白壁学院

　白壁学院高校・中学校・小学校を運営している。桜川家歴代当主と家臣団の子女に近代的一般教養を習得させることを主目的に創立され、以

来 130 年以上にわたり同家の支援を受けてきた。法人理事長には川奈家の流れをくむ家が世襲している。現在お屋敷様の意向により、真條マモルや藤代真穂子、結城ちはやが高校に、15 才以下の数名の家臣が中学校、小学校に通学している。また、未出仕の者 10 数名も通っている。私学としては規模は大きくはなく、小学校 400 名・中学校 200 名・高校 450 名程度でしかない。学力的には中の上から上の下程度の生徒が通う学校で、部活動もとくに活発ということもない。どこにでもありそうな普通の学園といったところだが、これは目立つことを嫌う桜川家の意向が強く反映されてのことである。

・桜川家家臣（直臣）ステータス並びに待遇等

桜川家には家臣と直臣（じきしん）とで大きな違いがある。家臣とは七臣家二十七流を汲む 600 余りの家に所属する者たちの総称であり、年齢や性別は一切関係ない。一方で直臣とは、桜川家による考査を経て直接雇用された家臣をさす。よって彼らは女性であり、年齢も 30 歳未満の者ということになる。在職にあたっての年齢制限は「桜川家掟書二十七箇条」には記載されてはいないが、主家を支えるため次世代を産み育てることは義務として明記されている。このため暗黙の了解で暇乞いは 30 歳未満となっている（近代以前は 25 才程度であった）。

直臣になるには厳しい審査を通過する必要がある。忠誠心や霊力の強さ、希望する管掌分野のスキルはもちろんのこと、容姿についても問われる。考査は毎年 2 月初旬に行われ、例年倍率は 3～5 倍となっている。それほど高い倍率ではないようにもみえるが、応募者全員が相応の能力をみにつけているため合格はかなり難しい。したがって、姉妹で出仕が許されたまりん・まろんは快挙を成し遂げたということになり、この家にとっては後世まで語り継がれる栄誉ということになる。晴れて直臣となればその待遇は非常に恵まれている。まず合格者の家に支度金の名目で 3000 万円が与えられる。当事者は在職期間中は特別な許可がない限り外出は認められないが、金銭的な負担は一切ない。必要な私物があればすべて主家が用意してくれるし、実家のために購入したいものがあった場合も基本的には了承され、数百万円程度ならば理由すら問われない。また、借財の申し出も基本的には認められ、数億円単位までであれば低利かつ長期返済での融資が受けられる。この制度を利用して実家の自宅を購入したり、親が実業家であれば工場や設備投資の資金にすることもある。慰労金という名の退職金の額も高額で、たとえ無役で終わった者でも 10 年程度務めていれば、1 億円近い額が支給される。

直臣のステータスはかなり高い。桜川家臣というだけでも同家の支配が及ぶ企業や団体にはそれなりの影響力を行使できるが、直臣となればなおさらである。その気になれば、地元首長の首を挿げ替えるくらいのことも場合によっては可能であり、軋轢が生じた勢力間の仲裁といったこともできる。

ほのかがマモルの授業参観に出向いたとき、白壁学院は上へ下への大騒ぎとなったのはこうしたことが背景としてある。ちなみに、家令部長まで上り詰めると、退職金は 1 年間で 2 億円が加算される。ほのかの場合は現在 6 年間その任にあるので、12 億円以上の退職金が支給されることになる。

奉公を終えた女たちには見合い話が山のように舞い込む。それは家臣の家からだけでなく、桜川家に近づきたいと願う有力企業の家庭などか

らもやってくる。こうした事情もあり、直臣になりたいと願う者は数多い。

·キャデラック（1953 年製）

　桜川家当主と特別に認められた者だけが乗車を認められる特別車。次期当主と位置付けられるマモルの通学に利用されている。外観は生産当時と変わらないが、内部は常に最新の機能・性能に置き換えられている。
マモルが桜川家にやって来た際に、最寄駅までほのかが車両班長のまりんの運転で迎えに行ったときも使われた。
　なお、キャデラックは歴代アメリカ大統領専用車としても採用されている。

· 班長会議

囲炉裏の間は 12 畳で囲炉裏の長さも上記の 2 倍ある。　　囲炉裏の間にあるものは上記（中央画像）より一回り大きく、鉄瓶の横でイカなどを炙ることができる

囲炉裏の口も 2 つある。

　班長長屋の囲炉裏の間で行われる。屋内部班長会議と屋外部班長会議、全体班長会議とがある。作中で描写されるのは全体班長会議だが公的なものではなく、生活班長ちはるからマモルについての感想を聞く私的な集まり。そのためざっくばらんな中で進行される。